

第9章 国への訪問者

日本に関して何よりも奇妙な事の中でも、最も興味深いのは、在日外国人の多くが、日本を好きだと思えるようになりながら、程度は人それぞれであるが、日本に苦痛を感じているという事実である。桜の花の国土に魅了された多くの外国人は、幻滅して去って行った。住むのが長ければ長いほど、失望は深くなった。日本に熱狂的な作家のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）や、同様に日本を友好的に称賛したゴーハム夫婦といった何人かのアメリカ人は日本を好み、国籍を代え、天皇の臣下になった。しかし、前者は学校の教師の給料が、外国人の地位を放棄すると日本人と同じ僅かなものになり、国籍を取得した国に深く失望しながら亡くなったと言われている。また、後者は現在、アメリカにいる息子たちとは離れ離れになっており、国籍を受けてほんの数か月しか経っていないのに、新たな国が以前の国との死闘から抜け出せない状態になっているのを見ることとなっている。この痛みを避けることができた一人が、アメリカ人のベテラン特派員で、日本で長い間従事してきたフランク・ヘッジズであった。1940年の東京、彼は捧げた二つの国家の未来への希望が絶たれつつ中、この世を去った。

さらに奇妙なのは、外国人が日本人に魅力を感じる理由が、後に、外国人が興覚めする理由でもあるという事実である。ただし、多くの外国人は、このことに気づいていない。日本人の素晴らしい国土に住んでみた人のほとんどは、日本人の礼儀と尊敬に感動する。外国人に示す礼儀と尊敬は、統治者に対しては、さらなる敬意で示し、自分自身を卑下することに、外国人はこれまで以上に感動する。同じように、称賛に値するのが日本人の紳士さと従順さにも当てはまり、この資質は特に日本女性に顕著である。しかし、もし、日本人に礼儀も敬意もなかったら、彼らの残虐と頑固さがこれほどあからさまになることはなかっただろう。そして、彼らに外国の雇用主への従順さがなかったら、天皇に対しても従順でなく、今後、天皇のために同じ外国人への戦争に一生を捧げようとはしなかったかもしれない。1941年に東京で外国人に従順だった日本人の若者が、戦争の権力者にはさらに従順で1942年に無人地帯の戦場で再度その外国人と会うことになったとしても、それは想定内の話だ。彼らのこれらの様々な資質は見事なのかもしれないが、日本人は、自分達を差別される者だと捉えようとすることで、多くの場合、援助されることなく、致命的になるかもしれない。彼らの基盤には封建時代の考え方と封建時代の文化があり、これが、外国人が日本で居心地が良く、安価で過ごすことが出来る主な理由の一つであり、それは封建時代の統治者と同じであるが、その後、幻滅を感じる理由でもある。

もう一つの日本人の資質は、恐らくすでに十分に評価されてきたが、比類ない勤勉さ、鋭い洞察力、早熟さ、そして、外国の考えを理解し、吸収する能力の高さであり、このうち、実

用的で物質主義的な性質についての理解と吸収能力は特に優れていた。近衛公爵が「物質主義」を攻撃していたのにも関わらず。外国人は多くの日本人の礼儀、優しさ、清潔さ、もてなしを正当に称賛したが、このうち、もてなしは外国人から、その西洋の秘密を取り除くために忙しかった。バジル・ホール・チェンバレンは最高の日本研究者の一人で、1867 年の明治維新の直後に、日本が多くの外国人を雇用し、日本人に素晴らしい科学の発見を学ばせているのを観察した。多くの外国人が高い給料が支払われ、風変わりな現実離れの日本国に滞在する機会を得たが、彼らの子供や孫には、その後、大変な不幸が待っていた。

日本人は外国人を「真似」することでしばしば皮肉的に批判されているが、日本人が西洋の科学的知識を求め、獲得したことは彼らの先見の明のお陰であり、この先見の明は他国には欠けていたものでもある。この科学的知識を彼らが独自で発展させ、たとえそれが順調に成功していたとしても、それには何年もの時間がかかっただろう。ペリー来航で開国した時、日本は組織的、技術的、そして、精神的にも封建国家であった。西洋と東洋の二世紀以上のギャップを外国人が発展した成果を提供し、日本人にその使い方を学ばせることで解消したが、これ以上に早く解消する方法を提案できた外国人がいたであろうか。

イギリス人の A.G.ホーズ中尉が日本のジャンク船を近代の海軍に改造したことがチャンバレン氏に記録されている。フランスは横浜造船所を作ったが、ここは、後にフランスを脅し、インドシナを放棄させた艦隊の主要基地の一つである。フランスは初めて日本人に近代の陸軍を組織する方法を教えたが、だからと言って、現在、フランスは感謝されにくい。日本人が外国陸軍の優劣を判断することを学び、フランス人教官をドイツ人教官に変更したが、その後のフランスでの軍事的出来事を考慮すると、この判断が完全に愚かだったわけではなかった。

フランスはまた、日本に文明規範を導入させたが、日本はそれを日本の目的に適応させてからは無視することを学んだ。日本人に日本人を苦しめる日本方式を止めるべきだと主張したのもフランスだった。しかし、日本人は再び、彼らの独自性を主張し、フランス人だけでなく、イギリス人とアメリカ人を苦しめたが、彼らの先人たちは日本政府の要望に応じて、侍の国家に近代の教育制度、郵便局、電信電報、鉄道、水道工事、築港工事と様々な近代工業の方法を導入させていた。後に、アメリカ人が飛行機を発明し、開発したあと、日本にやって来て、この新たな技術を日本に教えた。最近では 1940 年の夏に航空機のダグラス社とロッキード社は東京に支社を置き、日本人に近代の飛行機に製造方法を教えた。1940 年の最初の数か月には 5 人のアメリカ人が巨大なダグラス社の実験飛行機と共に日本に派遣され、その導入費用には数千ドルを要したが、ほんのわずかの値段で日本に売却された。石油企業、工業企業や他の企業も同じように日本に製品を供給し、代理店を置いた。

日本の強さは、それが何であれ、暗く隠された謎や「国家機密」の中にあるのではなく、民主主義諸国から提供された、多くに設計図、模型、材料を理解し、開発する日本の能力の中にある。民主主義諸国は、その寛大さによって、盲目的で愚かにも、論理的に信頼する根拠がない国にこれらを提供した。この事実を確認しなければ、今後も現実を見ないまま続けることとなり、これまでの状態が今後も続き、大変なことになる。ここでは、日本の産業発展に関するよく知られた数字だけでなく、日本の「国家機密」であるためにあまり知られていない数字も挙げることができる。たとえば、1941年の日本の鉄鋼生産量はおよそ750万トンで、航空機産業は年間約1万機の航空機を生産できるほど整備されていたという信頼性の高い推定値などがある。しかし、これらの重要性は、これらは西洋が日本に航空機生産に必要な技術と機械を提供したことの結果であるという衝撃的な事実と比較すると影が薄れる。

外交と同様、外国との一般産業と文化交流において、日本ほどギブはなく、テイクが多い国はおそらくないであろう。そしておそらく、その国のために手助けしただけでなく、他と競争しながら供給した人々に対して、日本ほど、思いやりと同様、感謝の気持ちを持たない国家は存在しないだろう。

美しく、松で覆われた小さな島である封建国家の日本が最初に世界に知られたのは16世紀中期にポルトガルの探検家が発見してからであった。聖フランシス・ザビエルが日本に26か月滞在し、彼による日本をキリスト教へと改宗させる行動は、その後も多くの他の伝道者によって続けられた。その後、日本は17世紀前半に外国人とキリスト教に改宗した人々を追放し、根絶させた後に鎖国化した。その後、長期の鎖国期間中、日本人はポルトガル人とその後はスペイン人が持ってきた思想と器具を会得した。彼らは引き続き、輸入し、外国の器具と方法について学んだが、それは日本の西の先端になる長崎にある出島に切り離されて定住が許されたオランダ商人の居留地を通じて行われた。

19世紀にペリーがやって来てからは、日本は再び外界へと解放され、新たな思想と発想を持ってくる外国人を、両手を広げて歓迎した。この時期には、アングロサクソンによる影響が主で、日本人は多くのアメリカ人とイギリス人と友達になった。彼らはこの小さな諸島と小さな人々に愛着を感じるようになったが、不幸にもこの人々についてあまり深く考えることは出来なかった。日本人について、常に、小さい有色人に、エグゾティック、或いはグロテスクと言った形容詞を付けて記載したピエール・ロチの態度は、今日まで引き継がれ、それは外国旅行者だけではなく、自分の信念を守りながら、日本で働くことが困難な多くの外国の職員や新聞特派員が持っているものである。

偉大なバジル・ホール・チェンバレンは病弱なイギリス人学者で、彼の著作を理解すれば、

誰もがその深い見解と感謝を感じるだろう。彼は 1873 年の明治維新直後に日本にやって来て、西洋の文化と科学の種が未だ封建制度の日本に蒔かれ、開花する驚くべきドラマを目撃した。しかし、チャンバレンが 1905 年に日本を去る前、彼は深く愛していた日本について心配し、その後 1935 年にジェノバで亡くなるまで、その心配は続いた。彼は日本のある変化に気付き、それがその後、日本人が起こしうる最も残酷な形での偽りと暴力へとつながった。訪日してから最初の数年で、彼は彼の古典的著書「(日本人の物事) Things Japanese」の中で、日本では「外国」と「良い」は同義語だと書いた。その後、彼はある発展について説明しているが、それは 1940 年と 1941 年の出来事について殆ど正確に書いているかのようで、ここにその全文を引用する意味がある。

「こうした状態は 1887 年に突然に消え去った。今の意識は『日本は日本人のためであり、日本らしくあれ』というものだ。外国人従業員は解雇され、自国民が雇用された。国会と参議院は、メートル法による長さや重さの測定制度は国家の恥だと反対した。東京商業会議所も、その時まで銀と銅の硬貨に使用されていたローマ字の命名法を新たな硬貨からは使用しないことを決定した。民族衣装が大規模に復活され、昔からの娯楽と国家の骨董品への興味が復興されただけでなく、日本人の現在の状況の特徴は、我々(西洋)の土台と我々の兵器によって我々を打ち負かすことを決意したことである。日本は太平洋の産業を独占し、近代の戦争と外交関係でアジアのリーダーになろうとしている。」

そして彼は日本人が、ほんの少し学んだだけで、十分に理解したのだと思い込み、教師に向かって、新たな知識を得るための方法について教え始めていると述べている。日本人の中には自分らで哲学体系を再構築する課題に取り組みだした人たちがいた。国際法について新たな視点を生み出すには、日本が特別に適していると説明している人たちもいた。(彼らが言う特別で新たなものとは我々世代は既に知っているものだ。) 外国人の伝道師は時代遅れとして、見捨てられ、自国の「優れた神学」を発展しようとする新鮮な宗教に転向した。「さらに」著者は続けて、「勇気、愛国心と忠誠心は日本人にとって特別な美德であり、少なくとも、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカといった劣等国で同じ語句で呼ばれているものに比べて、その質は、ずば抜けた明るい輝きを発していることが発見されたこととなった。」

尊敬すべきチェンバレンは、おそらく将来への不安感と日本人への深い愛情から生まれた謝罪で締めくくった。「日本は若い国、少なくとも若返った国であり、若者は自信を持っているものだ。年寄りはその望み過ぎてはならない。」さらに後年、年老いて衰弱していくと、20 世紀初頭について次のように書いた。「もし、最近の 30 年間にヨーロッパ主義への関心が冷めているのが事実だとすれば、それは感情の問題にすぎず、些細な問題で世界主義

(コスモポリタニズム) からナショナリズムに回帰したにすぎず、間一髪ではあるが、実際的には影響を及ぼしていない。スチュアート朝やフランス正統王朝主義者、ドン・カルロスのことを覚えている好奇心旺盛な故郷の人々が、封建主義に好意的に反応する日本人はいるのかと尋ねることがある。その答えは、いいえ、決していない。太陽が輝きを失って水が上流に向かって流れ始めるまでは。」チェンバレンは、彼の天才性と学識によって、これらのことが実現するのを見る苦痛から回避された。日本に多大に貢献し、親密に生きてきた彼が、日本への擁護の熱意が高まると同時に、心の中は正しかったのかを自問するのは当然だった。

しかし、日本にいる我々の多くは1941年に太陽が輝きを失くしたのを見た。既にこれまで、しばしば太陽の輝きは遮断されていた。外国人は逮捕され、暴力を受けたが、それは刑務所だけではなく、路上でも行われた。東京では英国大使館に石が投げられ、天津ではイギリス人から衣服が脱がされた。アメリカ大使館の周囲の白壁に汚物が少なくとも2回塗りつけられ、最終的にそこで警察官が警察部隊を強化した。アメリカ人とイギリス人は外国諜報員からだけではなく、日本人からも追われ、尾行された。日本人気質としては、親切と儀礼以上に、残酷性と暴力性と抑えられないナショナリズムがある。

フランス陥落直後に近衛が国内で「新秩序」を声明し、日本の主要都市で16人のイギリス人が憲兵に捕らえられた。その後の、ロイター通信の特派員が亡くなったことについては既に述べた。1875年にフランス人によって近代法が成文化され(**讒謗律・新聞紙条例：新聞や雑誌で政府を批判する言論を弾圧することを目的とした条例)警察による被告人への拷問は行わないことが約束されていたが、警察が以前の方法を復活しているとの告発を裏付ける事例が多数あった。1934年に東京の学校で教師をしているニュージーランド人のビカートンが逮捕され、数日間の隔離のあと、東京の多くの精神障害者が入っている、鼻につく、過密な拘置所に入れられ、24日間の反対尋問と拷問を受けた。最終的に彼は出国が認められ、マンチェスター・ガーディアンに彼の体験を発表した。彼は気が狂った警察官からバットで殴られ、蹴られ、殴打され、最後には頭を何回も戸棚で打たれた様子について述べた。警察の手による同じような礼儀正しく親切な処置によって、ロイター通信のジェームズ・コックス氏が1940年に拘置所の窓から飛び降りて死を選んだ可能性は否定できない。

外国人への暴力は警察の特権によって行われたわけではなかった。日本のナショナリストもまた、愛国主義の享楽に参加する権利があると感じていた。1941年2月、南方への攻撃の扇動が高まり続けている時、東京のフランス大使館の商務駐在員のタシェ伯爵はタクシーに乗せられ、運転手にほとんど意識不明になるまで殴られ、地面に捨てられた。運転手は、この歓喜を一人で独占しようとは思わず、近くにいた愛国者のグループを呼び、運転手が金

槌でタシェの体を叩きのめすと、彼の友人たちはこの負傷した外交官の腹と顔を蹴り、出血して、意識のない彼を神戸埠頭のコンクリート舗装に放置した。ここはちょうど、このフランス人が上海からアメリカの定期船 プレジデント・クーリッジに乗って到着した所だった。

全ての在外公館の駐在員と、さらにその最高責任者であるアメリカ大使のジョセフ・C・グルーは外交特権を持つ同僚に対する攻撃の残虐性に激怒した。ドイツを除き、在来公館の代表として、グルーはこの攻撃についてだけではなく、日本当局がその情報を受けているのに正しい対応を怠ったことを非難し抗議文を提出した。この抗議文はヨーロッパに出発予定だった松岡外務大臣に手渡され、その書面にはタクシー運転手が外交官を神戸税関に運んだ後、日本当局者のいつものように飲み込みが悪く、几帳面なやり方に、彼が助けを求めてうめいているのを放り出して、タクシー運転手と長たらく、出来事について話していたことが指摘されてあった。その後、このフランス人は警察署に連行され、運転手はこの外国人が日本を侮辱したとする物語をでっち上げて繰り返した。タシェはこの惨たらしい状態で約一時間経ってから病院に運ばれ、負傷したフランス同胞を援助し、必要な医療処置を確保してくれる神戸のフランス領事を呼ぼうとしたが、日本人は最初はそれを拒否した。グルーからの抗議に対して、日本の当局者は実行した愛国者たちを罰するふりをしたが、穏健な日本の政治家を殺したこの愛国者の仲間と同じように、この実行者は英雄として歓迎され、さらなる行動のために自由にされた。ナチスはこのグルーの抗議を支持しなかったが、その同僚のイタリア大使がすぐに支持しようとした理由は、妻のイタリア外交官が列車の中で別の愛国人から強く叩かれ、虐待されたからであった。日本人には同盟した白人と敵の白人を見分けることが出来なかった。

他の日本のおもてなしの例では暴力的な性格はなかったが、滑稽な面があった。あるイギリス人は日本での主導的な外国ビジネスマンで日本の現在の主力産業に少なからず貢献してきたが、彼による事業が、神戸での逮捕として報いられた。東京で広まった話によると、警察が彼の机から怪しい表記が書かれた一枚の紙を発見した。それには以下が書かれてあった：K. 1, Y. O., slip 1, K. 1, P. S. O., P. 1, K. 1.。これを見せられ、説明を求められたイギリス人は呆然とした。彼はこれまでこの紙を見たことがないと主張した。このことによって、警察の考えが秘密記号の疑いから確信に変えたのに過ぎなかった。彼は妻がそれについて知っているかもしれないので、妻と会わせて欲しいと頼んだが、拒否された。日本の警察は飽きることなく、長時間、腹立たしい質問と反対尋問を行った後、最終的にはこのビジネスマンの妻を呼び出すことを認めた。彼女はこの表記は新しいステッチの編み物を示すもので、娘がそれを書き写し、間違えて父の机に忘れてしまったのだと説明した。表記の意味は：knit 1, yarn over, slip 1 stitch, knit 1, pass slip stitch over, purl 1, knit 1 だった。

温厚なジョー・デナンは同じくらい温厚な AP 通信支局長マックス・ヒルの補佐で、ある夜、横浜から東京に帰宅することが出来なかった。彼は次の朝、髭を剃らず、目は充血して朝食には遅れて戻って来た。我々は同じアパートに住んでいて、いつもは私の部屋で朝食を取るようになっていた。そして、ジョーは彼に起こった出来事を話してくれた。私はそれをニューヨークに電報を送ることを勧めたが、彼はもっともな理由から、電報は送らないことにした。それは、アメリカ特派員は日本での記事は最終章で終了になりつつあることを感じており、攻撃を受けやすい状況が増えていることを考えたからだった。横浜からの最終列車に乗り、東京への途中の品川に着くと、列車は品川で終点で、他に動いている列車が無いことを知った。ジョーはそこで、駅から降りて、宿かホテルを探していると、いくつかの線路を多くの軍用列車が通過しているのを見た。それは 1941 年の夏で、日本は南方への攻撃のために、大規模の動員を開始していたのだ。その夜の居場所を探すために駅の近くの暗い通りを見ていると、それほど経たないうちに警官にばったり会った。日本人にとって、これは完璧にスパイ行為であり、それは、この時間帯に飽くことなく欲しがっていたものだった。外国人が午前 1 時、陸軍が部隊を移動している時間帯に駅の周囲の暗い郊外を徘徊していたのだ。ジョーはすぐさま警察署に連れて行かれ、何時間も質問を受けた。彼はかなりの惨めな夜を過ごすことになった。警官の日本語の質問を理解するよう努力し、回答したが、その言語を彼らはあまり理解できなかった。彼らは最終的には彼の身分証明書を繰り返し調べて、彼が横浜で友人たちと一緒にいたが、単に品川から先に行くことが出来ず、下車しただけだったとことを確認し、彼を釈放した。

日本とアメリカの平和が続いた最後の数か月間、疑惑の重苦しい雰囲気には外国人が不安を感じながら行動していた話は、ほかにもたくさんあり過ぎて語り尽くせないが、代表的なものをいくつか挙げておこう。ある日、アメリカ人主婦の女中が、重要な手帳をなくしたので刑務所に入れられるのではないかと泣きながらやって来た。さらに聞いてみると、その手帳には彼女の外国人の雇い主の日々の活動記録が書かれており、彼女はその手帳を毎週、定期的に警察に提出する義務があったことが明らかになった。彼女が報告を提出する日が来たが、その手帳が見つからなかった。最終的に、その手帳は洗濯物にある事が分かり、彼女のエプロンのポケットから見つかった。女中は女主人に感謝の礼を言い、手帳の濡れたページを乾かして、報告を提出しに出かけた。この短い騒動が終わり、家族全員は安心していった。ところが、その後間もなく、主婦が家に帰ると、居間で四つん這いになって家具の下の何かを探している男がいた。この主婦の夫はアメリカンプレジデント自動車会社の代理人で、日本はこの会社をアメリカの公的機構であり、精密に調査するのに値すると見なしていたのだ。男は発見されてひどく顔を紅潮し、急いでいると言って、丁寧にお辞儀をして出て行った。女中は、男はガス屋だと説明した。この頃には、外国人は日本のマナーや外交術を十分に学んで

おり、居間にはガス栓はないといった恥ずかしい些細なことを指摘することはなかった。

アメリカ人とイギリス人のうち、その立場が日本にとって重要だと見なされた人の殆どには秘密警察がやって来た。ロッキードのエンジニアの報告によると、彼が帝国ホテルに宿泊中に、部屋はほぼ毎日調べられ、革製バッグの鍵は壊された。さらに、彼がいなさそうな時間に彼が部屋に戻ってくると、驚いたことに探偵に出会った。ここでもいつものように顔を紅潮した職員は部屋を間違えて入ってしまったと説明して謝罪した。他の航空機のエンジニアの話では、カリフォルニアの事務所からの手紙が開けられていたが、その中身は日本に渡す説明書に過ぎなかったという。私の例としては、警察と私が互いに無邪気な探偵ごっこをやっていた。彼らは特に興味を持つフォルダーがあるようだった。私はジャパン・アドバタイザーに書いた論説と個人的な見解をクリップしてフォルダーに入れて置いた。朝は、私はこのフォルダーを机の一カ所に置いて、紐で二重結びにするようにしていた。午後になるとそれは他の場所に置かれ、蝶結びになっていた。これが定期的に続き、置かれる場所と結び方は様々だった。

ハル・シュライダーは殆ど最後まで残っていたアメリカ人で、ある朝早く、夫人と住んでいた東京駅ホテルに警察から電話がかかってきた。警察は彼が毎朝 7 時頃に皇居に向かう窓の前で器具を持ちながら何をしているのかを知りたがった。シュライダーはしばらくびっくりしていたが、すぐに思い出した。彼は電気髭剃りをコンセントにつないで毎朝窓の近くの鏡を見ながら髭を剃っているのを実演した。警察はこの説明に納得したが、どうも彼らは、彼が天皇の住居に望遠カメラか銃で焦点を合わせていると疑っていたようだった。

1940 年 10 月にワシントンの国務省がアメリカ人に極東を去るよう初めて警告し、その時からアメリカ人とイギリス人の大脱出が開始した。この期間はそれからほぼ正確に 1 年後の 1941 年 10 月まで続き、その最後の時、日本政府は国民を本国に帰還させるために最後の避難船三隻をアメリカに出航した。これは 1853 年のペリー来航から始まった日本の歴史の章の最後の光景だった。それは、88 年間、日本を支配してきたアングロアメリカの影響が最終的に撤退した運命の日となった。劇的な時代の最初をチェンバレンが、その最後をこの時日本にいた我々が目撃した。これは極東ではこれまで起きたことがない、壮大な悲劇的な人間ドラマであり、多くの輝きと同時に悲しみがあった。ほとんどの偉大な人間の悲劇と同じように、それは死によって終了した。

アメリカ・コミュニティは、中国人を除けば、日本の外国人としては最大で、約 2500 人がいた。彼らは国務省の警告に従い、撤退する人々が増え続けたが、最終的には縮小して 300 人のグループが残った。彼らは美しい日本の島々の敵意を持った現地人に囲まれ、外界から隔離された。

十分に象徴的に、同じ 1940 年 10 月に日本に唯一のアメリカの新聞が消滅した。私はジャパン・アドバタイザーにほぼ 3 年間勤務し、一握りのアメリカ人と一緒に最後までやって来たが、その新聞は日本の征服者に合併された。スタッフにとって、新聞の死は家族の一員の死のようなものだった。そして、ジャパン・アドバタイザーの終わりは長かった太平洋の平和の時間の終了を意味し、ジャパン・アドバタイザーは多くの他の新聞よりも大きな意義があった。従って、我々が最後の新聞を一段落した後、日本人が我々の事務所に入って来て引き継ぐのを見たとき、新聞記者の感情への抑圧は通常を超えていた。フィラデルフィア出身で、有能な編集長ドン・ブラウンと彼の大きな机の後ろの真ん中にごみが散乱し、汚れた我々の新聞室のことを私は覚えている。これはアドバタイザー・ビルディングの三階にあり、帝国ホテルの近くで、鉄道高架に面していた。彼の机にはいつもは新聞がバリケードの様に積まれていたが、この最後の日には、特別な時に行われるように、きれいに裸の状態になっていた。彼は途切れることなく、何年も、そして何時間もこの新聞のために没頭し、この新聞は極東で、たとえ一番でないとしても、優れた英語新聞の一つとなり、世界中の多くの人々から購読され、アドバタイザーの消滅は、彼にとっては新聞室にいる我々以上に、強烈な打撃だったであろう。

ブラウンの正面の席には、同じように長い年月をアドバタイザーに勤務し、人生の大切な時期を日本で過ごしたシアトル出身のニュートン・エジャーズがいた。彼の向かい側にはアメリカのホノルル生まれの日本人のリチャード・フジイがいた。はしゃぎまわるモンタナ出身のアル・ダウンズがフジイに面していて、その隣がワシントン DC 出身のディック・テネリーが、テネリーの後ろに私がいて、フロリダ出身のジム・チューが私の隣にいた。我々の後ろには一部が新聞のファイルが吊るしてあるため隠れていたが、ハリウッド出身で社会部編集者のテルマ・ヘッチがいた。別の部屋からやって来てビジネス面を担当するレイ・クロムリーと我々の編集主幹で社説を書いているウィルフリッド・フレッシュャーの二人はジャパン・アドバタイザーの最終製作に関わる小グループのメンバーだった。しかし、これだけでは足りず、我々に忠実なグループからの助けが必要だった（日本は彼らに我々を見捨てるよう圧力をかけていたからだ）。このグループは 5 人の日本人の翻訳家と 2 人のアメリカ生まれの日本人の校正者から成っていて、その一人がロイ・サイキで心の優しい真のアメリカ人だった。1 階には印刷機と植字師がいて、英語の知識がないのに植字する驚くべき妙技を発揮していた。

アドバタイザーは朝刊紙なので、夜中から午前 1 時に終了するのが普通だったが、最後の日は夕方早めに終わりにした。日本人がやって来たので、我々は個人的な書類や本を集め、わびしく、荒廃した新聞室を最後の眺め、喉の硬いしこりと見せかけの軽口を言いながら、部屋から出て、壊れそうな階段を降り、我々のビルと最後の別れをした。道に面する印刷室

の日本風の引き戸のガラス窓にはよく見る日本文字で我々の新聞の「アズバチザー」と塗られてあった。

新聞の死が広告部のクラレンス・デイビスとアル・ピンダーを含む全スタッフにとって深刻な個人的な喪失だとすれば、日本にやって来て、すぐにわずか4ページの新聞紙から、人生の殆どである半世紀で、アドバタイザーを築き上げた大御所のB.W. フレイシャーにとってはその喪失の大きさは比較できない。彼の妻の故フレイシャー夫人と息子のウィルフリッドにとってもそれは大きな打撃だった。アドバイザーは約50年間サービスを提供してきた日本の外国コミュニティにとって、これはこの国での自由なジャーナリズムと自由な考え方の終焉を意味した。

日本によってアドバタイザーが事実上掌握され、その弾圧と脅迫によって、独立したアメリカの新聞社として発行を続けることは不可能になり、日本のアメリカ人のコミュニティは急激に崩壊した。アドバタイザーの外国人スタッフの多くは翌月にアメリカに戻り、残りの、テネリーはNBCとロイターの東京特派員になり、ダウNZは国際通信社で働き、クロムリーはウォール・ストリート・ジャーナルの代理人に留まった。一方、私はフレイシャーの後を継ぎヘラルド・トリビューンの特派員になった。私は横浜に、八幡丸に乗って去る最大のグループの見送りに行った。この出発でアメリカ人のコミュニティが日本から退避する悲しい航行が始まることになった。多くの外国人と日本人が船に乗り、日本での最後の自由な新聞を出版した出版者に最後の別れを告げ、賛辞を贈った。片足を失い、車いすに座っているB.W. がいる客室には緊張感があった。この白髪だが、たくましい70歳を過ぎている老人は例年行われているアメリカ旅行に出発するのに過ぎないかのように、陽気で落ち着いていた。陽気ではなかったのは彼の日本人の友人と同僚だった。彼らはこれが最後のお別れだと知りながら、何回も何回も深く頭を下げた。そして、最後の出航の警笛が鳴ると、最後の一連のお別れをし、廊下を通して急いで船を出る時には、はっきり聞こえないすすり泣きに変わっていた。

八幡丸の出航は、栈橋にいた誰もが、たとえ黙っていようとも、その象徴的な国際的意義を痛感したが、私にとってはさらに、深い個人的な喪失が伴っていた。八幡丸は私の友人のジム・チューを連れていった。彼と別れたとき、私は二度と彼に会えないという辛い予感を覚えた。彼が英国空軍に入隊することを知っていた。この章を書く少し前、中国への旅行を記した章が印刷に送られた後、私はジムがマルタ島上空で戦死したという新聞記事を読んだ。ジムは、米国が無気力から目覚め、東西両方から迫る脅威を完全に気づくのを待ちきれなかった。彼は、自由な民に残された時間は短く、手遅れになる前にパイロットとして出来ることをやったほうが良いと感じていた。これは、彼の、新たなアメリカが作られ、勝利し、古

いアメリカを葬らせるしかないとの思いであり、我々は、古いアメリカを持ち続けるのは、あまりにも馬鹿げているという意見で一致していた。

ディック・テネリーと私が重苦しい気持ちで、横浜の日本郵船埠頭から陰鬱な東京に戻ると、八幡丸に乗船してアメリカ人が日本を去ることが暗示している最終的な結果に目の当たりにすることとなった。